

# shanti

2010  
春  
4月号

特集  
わたしの好きな先生

手を、とりあうこと。

私たちは向き合います。苦難の中にいる人々と世界に。



社団法人 シャンティ国際ボランティア会



- 1 国道を外れると、急に道が悪くなる
- 2 雨が多いため少数民族の家は高床式になっている
- 3 サラワン県の学校の校庭
- 4,5 脱糞や家畜の世話など子どもも家事を担う



夕食のおかずにする野菜を畑から取ってきた少数民族の子どもたち  
水くみや動物を狩りにいく日は大変だけど、みんなでおしゃべりしながらお手伝い

### ラオス 学校教育支援 南部サラワン県への 12時間

ラオスの学校教育支援の事業地は南部サラワン県にある。ヴィエンチャン首都（以下、首都）からサラワン県までの距離は約800km。赴任してから2年が経った今、移動した距離は地球を1周以上になった。移動時間は片道12時間。そのうち首都を通過するのに30分程度。その30分と、それ以降の11時間30分の間に大きな「差」を感じる。「差」はラオスの人々の生活に途方も無い格差を生みだしている。小学校の就学率では、首都は98%、サラワン県を含

む地方・農村部では半数以下の46%となり、その差は数字に顕著に表れている。

サラワン県へ行き始めて間もない頃、少数民族の村で会った13歳の女の子に「学校に行かないの？」と聞いたら、彼女は「結婚するだけだから」と言った。

安易に心無い質問をしてしまった事、そして、その時、教育が必要なる理由を少数民族の家庭に生まれ育ち、14、15歳で結婚する彼女にうまく伝えることが出来なかった事を抱えながら、今日もサラワンに向かって走っている。

(ラオス事務所 鈴木淳子)

### 巻頭言

# 道 みち

「もらさず救い助けんと誓う」  
藤本幸邦老師を偲んで

副会長 三部義道

昨年未亡くなられたSVA名誉会員藤本幸邦老師は、「これだ」と思うとすぐに行動される方でした。1982年、新聞に「カンボジア難民キャンプで日本の風呂敷が有効に

活用されている」という小さな記事が載ったときも、「これだ」と、すぐに「慈愛のふろしき運動」を展開されました。集まった数万枚の風呂敷をキャンプに送ろうとしたときに、その受取人や関税の問題で相談に来られたのがSVAとの出会いでした。有馬実成師と共に長野市篠ノ井を訪ねてみると、児童養護施設「円福寺愛育園」の体育館に「慈愛のふろしき」と印刷された段ボール箱が山積みされていて、その量の多さに唾然としたことを覚えています。

た上野駅でのこと、3人の戦災孤児に出会い、持っていたリンゴ1個を与えると、3人は一口ずつ回しながら仲良く食べました。その姿に感動した老師は、このままここに捨てておくことができず「寺に来て学校に行かないか」と連れて帰ったことに始まります。以来、愛育園において400人にのぼる子どもたちを育てられました。

カンボジア難民が発生するや、子どもたちの姿にも心を痛めておられた老師が飛びつかれたのが「慈愛のふろしき」だったのです。以来、現会長のお師匠様である若林順天老師と共に、何度となく難民キャンプやSVAの活動地を訪問され、多大なるご支援をいただきました。

また、カンボジアをはじめ、ネパール、中国にも学校建設をされるなど、数え100歳で亡くなられるまで、世界の子どもたちの教育支援を続けてこられました。

老師の行動の根底にあるのは、「かわいそうな子どもたちを見捨てられない」という慈愛の心だと思いません。そして、「我は仏にならずとも生きとし生くるものみなを、もらさず救い助けんと誓う心ぞ仏なる」という、仏教の実践に僧としての身命を賭されたのだと思います。

【SVAの使命】 私たちは、地球上の貧困や戦争、内紛、環境破壊、災害などによって苦しむ人々のそばに立ち、苦しみを分かち合い、その人々と共に解決のための活動を行います。特にアジアにおける教育・文化活動を通じて、「共に生き、共に学ぶ」ことができるシャンティ(平和)な社会の実現をはかります。

### Cover Photo

小学校の教室で国語の授業中 (ラオス)



# わたしのすきなよ先生

teacher and me

**小** 学生のころを思い出すと、悪さをして立たされたりしながらも、やさしかった担任の先生の面影が浮かびますね。アジアの子どもたちの思い出に残るのは、どんな先生でしょうか。

「大人になったら先生になりたい」。将来の夢を聞かれると、そう応える子が多く、みんな先生が大好きです。しかし、その先生を取りまく環境は恵まれたものではありません。カンボジアの場合、全国の小学校数6565校、生徒数約220万人に対して、教員は4万5千人です。1人の教員が平均50人を受け持つ計算になります。地方では、もっと教員の数が減り、小学校に教員が1人ということも珍しくありません。教員養成学校を出ていないのに、必要に迫られて教鞭をとっているケースもあり、指導にとまどう姿も見られます。SVAは子どもの教育環境を良くするために、教員の不足、質の問題を改善していきたいと考えています。

現在は研修会を開いて、教え方、教材の使い方などを伝えていくことで、教育の質を上げ、教員の支えになろうとしています。

この号では、SVAの研修会から学んだことを活用している、各国の先生を紹介いたします。また、SVAが運営している図書館で、子どもに絵本の楽しさを伝えている「ミャンマー（ビルマ）難民キャンプの図書館員もあわせてご紹介いたします。」

# ラオス

Laos

- 1 テーメーポムン小学校。新校舎は2008年にできたばかり
- 2 ポンサーイ先生は2、3年生を教えている
- 3 通う児童が増えて、教室も賑やかになった
- 4 文字を教えるための教材



## 子どもたちと話ができるようになってきた

ポンサーイ先生が教鞭をとるテーメーポムン小学校があるラオングム郡は、少数民族が生活する割合が、他の7郡に比べて多いところです。ポンサーイ先生は、同じ県内にありますが、公用語であるラオ語を使わず、ワビーン郡からやってきました。新米のポンサーイ先生は「頑張る

## 子どもの声



僕はンゲ族だから、ラオ語が分からなかった。でも先生は何回も何回も教えてくれて、優しいです。大好きです。

## 困っていること

貧しい家庭が多いので、家の手伝いを優先せざるをえずに子どもたちが学校を休みます。休んでしまった児童と、休まない児童との差ができてしまうので、全員に分け隔てなく教えることが難しいです。

## 教員としてのやりがい

私が（少数民族の）ンゲ族の言葉と話すと、おかしい（声調が合っていないという意味）と笑うんです。私が頑張って話しているという努力を認めてくれている、子どもたちの気持ちがわかるので、嬉しいです。私はラオ語を話す家庭で育ちましたので、教員になって初めて言語の苦労を味わっています。子どもたちと同じ苦労なので、一緒に頑張っています。

## 少数民族言語教材の研修を受けて

子どもの言葉が少しずつ分かるようになりました。研修会を受ける前はンゲ族の言葉が全くわからずに、成す術なしでしたが、研修会后、教材等で少しずつですが、お互いの言いたいことが分かり合えるようになって、休みがちだったンゲ族の子どもたちが学校に来る日数が増えました。

教室の中がスカスカでなく、一つでも多くの席が埋まって、賑やかな教室になると嬉しいです。

## サラワン県 少数民族の子どもと学びあう ポンサーイ先生



ラオス語を教えるための教材（フラッシュカード）。裏に少数民族の言葉で動物の名前などが書いてあり、子どもとコミュニケーションが取れるようになっている



## 子どもと同じ。

それには、ポンサーイ先生が赴任してから、今までよりたくさんの子もたちが学校へ通い始めたこと聞かされました。今は、SVAが建ててくれた新しい校舎ができ、先生も1人増えました。子どもたちと話ができるようになってきました。給料はまだお米のままでしたが、村人の勧めで地元的女性と結婚したし、もう少し頑張ろうと思っています。

■初めてポンサーイ先生に会ったのは、私が赴任後まもなくのことだったので、もう2年の付き合いになる。ポンサーイ先生はサラワン県生まれで、もうすぐ30歳。私が学校に行く度に「ススキー、ススキー」と声をかけてくれる。インタビュをしたので、いつもに増してニコニコしていたので、何かあったの？と聞いたら、「二足先に結婚したよ」とニヤニヤしていた。（鈴木まき子）

# 難民キャンプ(ビルマ)

## 困っていること

本の紛失が多いことです。最近はその第三国定住プログラムで、急にキャンプを去らなければならなかったり、外国へ行くのに母語の本がほしいという人が増えているのだと思います。でも、限られた本しかないで、キャンプで共有して使うことを皆に理解してもらいたいのです。

Myanmar  
(Burma)  
Refugee Camps

## 研修を受けて

図書館員になってから数々の研修を受けました。大きな本の読み聞かせや人形劇などは、難民キャンプの人間にとっては知るよしもない新しい活動で、研修を重ねるごとに新しい活動を取り入れられる事が嬉しいです。

## 私が大切にしていること

私は、この図書館で働いて10年になりますので、新しい図書館員たちに教える立場にもなっています。最初は読み聞かせなど下手なのは当然ですが、一番大事なのは「笑顔」だと思っています。子どもたちが、リラックスできる環境を私たちが作り出すことで、子どもたちをよりおはなしや活動へと引き込んでいく事ができるからです。

- 1 図書館では図書館員が描いたウサギの絵が子どもたちを迎える
- 2 この図書館で働く3人の図書館員

「柵」の中での生活。危険を冒しても「柵」を飛び越えて、もっと違う世界を見てみたい、そんな自然の欲求を口にする事が憚られる。そんなキャンプの中の図書館は、教科書以外の「学び」を提供しています。おはなしを通じて子どもたちは、いろいろな事を体験し、「この「柵」の

外の世界について学びます。図書館で提供する遊びは、子どもたちの創造性を伸ばし、新しい事を学ぶ喜びを促していきます。絵本を広げながら、自分たちがどこから来たのか、自分たちの母語をなぞっていく。限られた自由への選択の一つは、外国で暮らすことであり、生きて行くためには、その国の言葉を学ばなければなりません。学校で学ぶ言語が徐々に増えていく中で、親たちは母語を継承していくことの必要性を感じています。図書館は、キャンプのそのような住民の手によって支えられています。「いつか、キャンプの外に出た時のために」長期に渡る難民キャンプの状況の中で、私たちは人びとの側に立ち、励まし続けなければいけません。キャンプの図書館にはそんな役割もあるように思えます。



おはなしだけでなく、たくさんのお話を教えるのが、とっても楽しみです。

フダム (11歳)

6年前に夫を亡くし、女手一つで子どもたちを育ててきた。配給された資材で自分たちの家屋を維持していかなければならない。雨季の最中にいたんだ屋根はぼろぼろ穴が開いたままだと困ったように教えてくれました。一人の母として、キャンプの子どもたちの未来に向けてお手伝いをしたいと話していました。(山本英里)

## 難民キャンプの図書館員になって10年 スノーさん



ダビセ (10歳)

スノーさんは、いつも私たちに楽しいお話を読んでくれるので大好き。城文のおはなしは、おもしろくて笑っています。



図書館に来ると一緒に遊んでくれるので、嬉しいです。ゲームとか一緒にやってくれます。

エヒラーソン (7歳)

## 難民キャンプの図書館の役割

子どもたちが成長する過程で体験する様々な経験は、子どもたちの発達に大きく影響します。学校での勉強が大切な一方、課外活動や遠足、休暇中の思い出など様々な経験を待て大人へと変わっていきます。

近代は情報社会であり、様々な情報が溢れています。『難民キャンプ』という環境では、それらすべてが簡単に普及であるかということをお伝えられます。

「柵」の中での生活。危険を冒しても「柵」を飛び越えて、もっと違う世界を見てみたい、そんな自然の欲求を口にする事が憚られる。そんな

# タイ Thailand

- 1 マーナ校長が校長を務めていたラーチャマクロ校
- 2 授業の風景
- 3 モン族の民族衣装をまとった村の人たち
- 4 学校の近くには森林公園もあり自然豊か



「自分自身を成長させることが最も難しい」  
マーナ校長の好きな言葉です。名譽、金銭のためでなく、人間として正しい人生を送るために忍耐、努力を惜しまない。校長の姿勢に多くのことを学びました。

アラナー・ブンチャンタ 高校1年生



## 民族の文化に誇りを持ち 社会で生きていく力をつける

マーナ校長は、バヤオ県、モン族の地域の小中学校で10年間の任期の間に、少数山岳民族(モン族)の学校のモデル校として生まれ変わらせることに成功しました。具体的には、モン族の文化を学習に取り入れ、アイデンティティ保持に努め、モン族の生業である農業の実習で現代に即した専門性を高め生産の向上を目指しました。

県から割当てられた予算では十分な環境が確保できないため、民間団体などへ働きかけ、自ら資金調達を行います。校長のこれらの努力が実を結び、地域の就学状況が改善され、今や県の教育局からの視察が次々と訪れます。タイの国内では、少数民族の子ども

## バヤオ県 モン族の奨学生を支える マーナ校長先生

### 教員としてのやりがい

今まで学ぶ機会がなかった村の子どもに、教育を提供できることがやりがいです。モン族の村の子どもたちは、コミュニティの古くからの風習と、学校で学ぶタイ社会での生き方の狭間に生活している。大切なのは、両者のバランスをとりながら新たな生き方を手に入れること。私の学校では、民族の文化に誇りを持ちながら、タイ社会で生きる力を身につけることを目標としています。



### 困っていること

メディアの発展により近代的な価値観が流入し、子どもたちはそれぞれの年代、地域、文化に即した行動がとれなくなっています。その中で、指導者としての苦勞が増えています。

もたちへの教育保障が重視されているとは言えません。これらの子どもたちへの教育活動は、文化の差、言語的な壁などがあるため、将来を見据えたさまざまな工夫、丁寧な対応が必要です。よくある事例に、少数民族の地域、とりわけ僻地の学校において教員が定着せず、教育の質の低迷、地域との信頼関係の破綻を招くというものがあります。このような状況下においては、行政から下りる政策に従うばかりではなく、地域のニーズに即した独自の方針を積極的に推進する強いリーダーシップが必要です。学校の校長の采配がその地域の教育発展のカギを握ることとなります。

SV Aタイランドの奨学生事業には、マーナ校長のように地域に密着して奮闘する先生の存在が欠かせません。

松尾久美

# 途上国の教員を取りまく環境 教員の支援の必要性

**SVA**は図書館事業の要素として教員研修を重視してきました。それは図書室を整備し、本を配るだけでは、子どもの読書習慣は定着しないからです。子どもが本を読むようになるためには、本を子どもに手渡す図書館員あるいは教員

による読み聞かせや貸し出し、本の適切な配架などのサービスが必要で  
アフガニスタンでの図書館活動の研修会で、ある教員は「昔はソ連と戦うために銃を持っていた。今は本を持って、子どもたちに教えられる



**ラオス**  
少数民族教材活用/フラッシュカードの使い方実習など



**アフガニスタン**  
教員対象の図書館事業/読み聞かせ、紙芝居などの実習

この号で紹介した先生たちと  
図書館員が受けた研修は  
楽しくわかりやすい指導に役だつよう、  
SVAが企画運営しています



**カンボジア**  
小学校教員/教材の作り方や絵本の使い方の理論 実習も



**ミャンマー(ビルマ) 難民キャンプ**  
図書館員/読み聞かせ、紙芝居などの実習

ことがうれしい。SVAの研修を受けた後、最初は読み聞かせをするこ  
とに抵抗があった。しかし、読み聞かせを  
実践してみても子どもたちが熱心に話を聞いてくれ、楽しそうにしているのを見て、これは本当にいい活動だと思った」と話しています。  
一方、教員の待遇の悪さを考えた時、研修だけでは不十分なことも確かです。世界の教員3000万人のうち700万人は、文化的最低限の生活をおくるために必要な給与を得ていません。給与が低いため、教員は授業を放棄して副業で稼ぐか、子どもから学費を集めるしかありません。カンボジアの首都プノンペン市では一世帯がひと月生活するためには、最低150ドルが必要であるにもかかわらず、教員の月給は約30ドル。しかも遅配がよくあります。そこで、午前は学校で教壇に立ち、午後は学校の運動場で子どもにアイスクリームを売る教員もいます。SVAの教員研修で1日約3000円の日当をあてにして研修に参加する教員が少なからずいるのも確かです。教員の待遇が改善されれば、研修の効果はもつとあがるでしょう。  
教員給与の低さの背景には、途上国政府の圧倒的な資金不足があり



日本政府的な教育援助の問題の一つが、教員給与と教科書代といった経常経費(毎年発生する経費)の支援

(三宅隆史)



写真: 瀬戸正夫

2008年(平成20年)12月1日より新しい公益法人3法(注: 法人法、認定法、整備法)が行われました。これにより、主務官庁制が廃止され、準則主義を採用するに当たり、法人自らが責任を持つて自主的・自律的に運営を行っていきけるよう、法律でセルフガバナンスに関する事項が明確に定められました。  
現在の公益法人はすべて暫定措置である「特例民法法人(特例社団法人、特例財団法人)」となり、シャンティ国際ボランティア会も、5年以内に公益社団法人か、一般社団法人に移行する必要があります(新しい法律の施

行後は特例民法法人として5年間に限り存続できる)。  
**SVAが「公益社団法人」をめざす理由とは**

この法律改正に伴い、SVAでは事業の運営、健全な組織運営の継続を考え、まず「公益社団法人」の認可を取得しなければなりません。また、日々、みなさまからお寄せいただいている「寄付」についても、公益事業として「税制上の優遇措置(寄附金控除)」が受けられる状況を確認していくことも改正の大きなポイントとなります。

現在、SVAは外務省認可の公益性のあるNGOとして「特定公益増進法人(特増)」となっていますが、今回の主務官庁制度が改められたため、SVAの場合、今後、外務省から内閣府に移行申請手続きをおこなひ、公益認定等委員会の審査を受けて公益社団法人(公益目的事業を行うことを主たる目的とする法人)を取得しなければなりません。方向性としては、SVAは今まで通り「国際協力」という枠組みの中で公益性のあるNGOとして、今後も活動を続けていく事がより重要で、SVAが「公益社団法人」でなく「一般法人」の移行を選択した場合、みなさまからの募金は「税制優遇」が受けられなくなり、SVAとしては「公益社団法人」として、移行申請していきまます。ちなみに、旧制度(外務省)での特増認可が受けられる2011年12月6日までです。

### 移行手続きの進行状況は

昨年より公益法人化に向けた検討を重ね、移行手続きの準備作業を開始しました。移行作業にあたっては、専門家のアドバ

イスを頂きながら理事・代議員を対象にした移行勉強会を2回開催し、新たな公益法人法での公益目的事業のあり方(事業運営、新たな会計等、移行作業に必要な学習をしています。3月の総会において、公益社団法人移行に伴う「新定款・諸規定(案)」の検討もさせていただきました。臨時理事会臨時総会を経て、移行申請を進めていく予定です。

### SVAの運動体としてのあり方は変わりません

今回の法人移行は、認定法に沿って団体責任において運営を強化することが目的です。SVAの運動体としてのあり方は、それに影響されることなく、今まで通りの活動を継続し、さらなる発展を目指すように考えています。

「共に生き、共に学ぶ」という地球市民社会の構築を目指し、開発途上国における開発協力事業を推進する」という定款の理念と思いは変わらず、今後も多くのみなさまと、活動を展開していきたいと願っています。

会員のみならずには、「理解と協力を願ひ申し上げます」(専務理事 茅野俊幸)

会員のみならずへお知らせ

## 「公益社団法人」移行に向けて

### ◎移行申請のスケジュール予定

※作業の状況、協議の状況次第で、臨時総会を複数回開催する事も検討いたします。

2010年6月~7月	(臨時) 理事会	申請書・添付書類の確認
2010年7月末以降	認定申請	認定申請書等の提出 公益認定等委員会に書類提出
2010年12月~ 2011年3月ころ	認可見込み時期	公益認定等委員会の審査時期により遅れることもある。
認可取得後	移行登記	主たる事務所所在地にて2週間以内に 登記申請
移行登記後	登記完了の届出	行政庁・旧主務官庁に届出
認定完了後	役員会	認定取得後、最初の役員会の開催
移行登記後	区切り決算	「以降登記日の前日まで」と「移行登記日」からの事業年度に区分して決算
最初の事業年度終了後	公益目的 保有財産等届出	最初の事業年度末より3ヶ月以内

### ◎新しい公益法人3法(法人法、認定法、整備法)

- ① 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律
- ② 公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律
- ③ 一般社団法人及び一般財団法人に関する法律及び公益社団法人及び公益財団法人の認定等に関する法律の施行に伴う関係法律の整備等に関する法律

タイ  
Thailand  
カレン族の村に  
移動図書館がきました



山あいにある村に移動図書館車がやってきました

2009年11月から今年2月にかけて、ミャンマー（ビルマ）国境沿いのカレン族の村々で移動図書館活動を実施しました。その村の一つ、ソーケーウィー村にできた新しい保育園での活動の様子をお伝えします。



「お姉さんはなにを読んでいるの？」



お母さんとおばあさんにも見せてあげる子もいます

ここでは保育園児のほか、隣の小学校からも集まり、約80人の子どもたちが活動に参加しました。まずは、手遊びや歌で子どもたちの気持ちをほぐすと、体が動き出します。絵本を開くころにはすっかり笑顔になっています。クライマックスは人形劇。全部で一時間弱の活動の後、図書館車に積んでいる本の中から、子どもたち自身が読みたい絵本を選びます。

思い思いにページをめくる子どもたち。音楽や笑い声につられて覗きに来たお母さんに、嬉しそうに絵本を読んであげる5歳の男の子。保育園の3歳の妹とページをめくる小学生の女の子。読む方も、読んでもらう方も、それを見ている人もほんわかしたあたたかい気持ちを感じます。

SV A タイランドの移動図書館車は、絵本だけではなく、絵本が作るあたたかい空間も一緒に運んでいきたいと願っています。

（松尾久美）

ラオス  
Laos  
ラオス国内8県目の  
公共図書館建物完成



子ども用のテーブルも置かれた館内

2003年からラオス国内で実施している、公共図書館活動支援。昨年末、支援8県目となるサイヤブリー県公共図書館の建物が、県庁所在地の目抜き通りに完成しました。建物の建設費は半額を県が拠出し、図書館員の研修活動も含めた他の費用は日本の外務省による「日本NGO連携草の根無償資金協力」の資金を活用して今年5月まで行っています。

1月22日、贈呈式が開催されました。首都ヴィエンチャンから陸路で北へ14時間かかるサイヤブリー県。贈呈式は、乾季には珍しく小雨の降る中、ヴィエンチャンの日本大使館から書記官、ラオス情報文化省官房局長、出版局長、国立図書館館長、そして県副知事等の来賓参列のもと行われました。

（伊藤解子）

1990年代からラオス国内で読書推進活動が開始されて以来、その実施を担当している国立図書館のコンドウアン館長は、「本に触れる場所ができることで、ラオスの子どもや、青少年が読書が好きになる。読書習慣を身につける機会となり、更に、近年ラオスで問題となっている麻薬などの問題に青少年が巻き込まれず、余暇を過ごせる場所を提供できる」と語り、公共図書館の意義を訴えました。

サイヤブリー図書館員は4名。ASEAN（東南アジア諸国連合）の図書館員賞を受賞した優秀な職員もいます。県では、今後、図書購入予算を配布し、図書館サービスを継続して行くことを約束してくれました。

ミャンマー（ビルマ）難民  
Myanmar (Burma) Refugee Camps  
難民キャンプからの  
平和の種まき



ゲームで交流するキャンプの子どもたち

2月1、3、5日、「難民子ども文化祭」（協力：「日本NGO連携無償資金協力」他）を開催しました。

ターク県内の3つの難民キャンプ（メラ、ウンビナム、スポ）を巡回し、各地のボランティアと共に活動を作り上げました。参加者は合計18民族32グループ640人の子どもたち。

昼はレク交流、夜は伝統舞踊・音楽ステージと、盛りだくさんの1日でした。ステージには3キャンプ合計で5000人以上の聴衆が集まり、自他の民族間わず子どもたちに声援を送る光景が見られました。また、シーカー・アジア財団の協力で参加したバンコク・スアンブルー地区の子どもたちが、キャンプの子どもたちと自然に交流していた姿も印象的でした。

この活動のベースは、SV A が10数回に渡って各国で実施してきた「アジア子ども文化祭」です。戦争、貧困、人権侵害など様々な困難に置かれている子どもたちに対して、伝統文化活動を通して民族性を高め、生きる力を養う機会を作ってきました。今回、「難民子ども文化祭」では、子どもたちが「母国」を含めた平和への願いを絵、歌、踊りで表現しました。

子どもたちの将来は、日本も含めた第三国への「定住」、ミャンマーへの「帰還」、それともタイ社会への「統合」。先行きは不確かでも確かな自分をつかむ、外に出られなくても平和の種まきをする。難民キャンプにおける難民の子どもたちが対象の「文化祭」は、とてもユニークな役割を担っています。

（小野孝大）

カンボジア  
Cambodia  
校長先生と  
村代表の運営研修会



初めてのグループ討論に緊張気味

2009年11月に3日間、SV A が新校舎を建設する学校の校長先生と、村から選ばれた学校建設委員長、あわせて56人を一同に集めて研修会を開催しました。

参加する学校のほとんどが、これまで1年生か2年生までしかなかった遠隔地の学校です。学校の運営・維持をイメージするのが難しいため、SV A では研修会を毎年開催するようにしました。

今回の目玉は「学校の敷地の有効利用」「学校運営への住民の参加」をどう解決するかのグループ討論でした。最初のうちは「お金が足りない」「村が協力的でない」など、こぞとばかり不平不満が出ていました。しかし、スタッフたちがこれまで経験した事例も交えて、解決策を模索する方向に導き、後半は各グループとも発展的な議論が展開されるようになりました。

ある村の学校建設委員長は、「私は学校に行けなかったの、紙や黒板に書いていることはわからないが、今日話し合ったことは必ず村のみんなに伝えます」と力強く語っていました。村に帰ってもこのように真剣に話し合えば解決策が生まれてくるということが実感できたようです。

なかなか結論までは達しなかったグループ討論ではありますが、参加者みんなのやる気を引き出すことには十分な成果が出た実りのある研修会となりました。新校舎竣工とともに、良い学校運営・管理もスタートすることでしょう。

（磯部正広）

アフガニスタン  
Afghanistan  
小学校3校が  
完成しました



新しい校舎と椅子に喜ぶ子どもたち

建設を進めていた「アハマディコット高等学校小学部」（児童849人、8教室、「フアクルラ男子高等学校小学部」（児童1882人、8教室、「カイラアバッド小学校」（児童694人、6教室）が完成し、2009年12月に竣工式が行われました。700冊の絵本がおかれた図書室も設置されています。

前者の2校では校舎が足りなかったため、半数の児童が野外での学習を余儀なくされてきました。カイラアバッド小学校にいたっては、全員が青空教室で学んでいました。今回の建設によって、就学児童数は3校合計で657人増加するとともに、青空教室の児童数は1682人から129人に減少するとうい成果が得られました。

竣工式でナンガハール州の

（三宅隆史）

経済局長は、「支援いただいた日本の人びとに感謝します。他のNGOや国連が建設する学校と比べてSV A の建設した施設は質が良く、高く評価しています」と述べました。

3校の学校建設、備品の供与にあたっては、外務省、焼野功さん、法龍寺、日本教職員組合、フェリシモ地球村の基金、大阪コミュニティ財団、アフガン寺子屋プロジェクトinしなね、弓矢八幡・WCRP 難民委員会のご支援をいただきました。

2003年の事業開始以来、SV A がアフガニスタンで建設した学校はのべ22校になり、合計1万9000人の子どもが安全で快適な教室で学ぶことができるようになりました。

## クラフト・エイドは25周年 2010年新カタログ完成しました!

今年、クラフト・エイドは25周年を迎えます。「お買い物のできる国際協力」としておなじみの活動の原点はラオス難民キャンプにあります。そこで暮らすモン族の人びとが作った刺繍製品をスタッフが日本に持ち帰り、1985年に難民支援バザーを開いたのがクラフト・エイドのはじまりでした。

それから25年、クラフト・エイドの活動は、生産者と消費者が対等な関係で行われる貿易「フェアトレード」として社会的に認知されるまでになりました。教育支援団体であるSVAのクラフト・エイドは、後発のフェアトレード専門企業や団体とは少し違う独自路線を歩んできました。扱っているクラフトはSVAが図書館事業を行っている国・地域に限定しています。手仕事の魅力と、その後ろにあるストーリーを日本の消費者に伝えることを心がけ、支援を必要とする小さな生産者（団体）とのつながりを大切にしてきました。

この夏、25周年を機にラオス・タイにクラフトの原点を訪ね、生産者と交流するスタディツアーを予定しています。また、日本全国47都道府県のお店にご協力いただき、「～フェアトレードのある毎日～わたしのまちのクラフト・エイド」フェアを企画しています。あなたの街のお店にもフェアがくるかもしれません。どうぞお楽しみに。

そして、完成したばかりのクラフト・エイド2010年度新カタログをシャンティと一緒にお届けします。今年コンセプトは「フェアトレードのある春夏秋冬」。クラフトが織りなすやさしい季節の移り変わりを感じてください。

皆さまからのご注文をお待ちしております。(クラフト・エイド担当 藤川和美)



新商品のアフガニスタンから届いた「ピースベア」

## たくさんのお手を経て届く「ありがとう」 こどもからの感謝状は4月にお届けします

毎年、チャイルド・ブック・サポーター（以下、CBS）登録の方（サポーター）へお送りしている「こどもからの感謝状」。この感謝状の台紙は、CBSのキャラクター「えかきさん」が箔押しされたSVAオリジナル。東京都在住のサポーター久保田勇さんにご寄贈くださったものです。

このオリジナル台紙が生まれたきっかけは、久保田さんが経営する「久保田箔押し」で業務中に出た用紙の端切れで作ったメモ用紙を、SVA東京事務所へ寄贈いただいたことでした。かわいい動物や図案が箔押しされたメモ用紙でした。それを見たとき、「こどもからの感謝状は、いままで市販のカード用紙を使っていただけ、オリジナルで作れたら…」と感じました。台紙製作を発注したいと久保田さんにご相談したところ、快諾いただき、このカード台紙が生まれたのです。

素敵なカードですし、何よりサポーターの方が特別に作ってくださったということが嬉しいです。オリジナルということで、サポーターの皆さんの心に温かさが伝わることを願っています。久保田さんからは「これからもなにか企画があったら協力するよ」とあたたかい言葉をいただいています。

ボランティアさんによる、手紙と写真の貼付作業を経て、「こどもからの感謝状」は完成します。子どもたちの笑顔と声と感謝の気持ちがこめられた感謝状を、4月にサポーターの皆さんにお届けします。

(チャイルド・ブック・サポーター担当 佐藤宣子)  
※4月1日から「絵本を届ける運動」担当へ異動



上 「えかきさん」は絵本作家たちとみちこさんデザイン  
下 中には子どもからの直筆の手紙と写真が

# シャンティな人たちが Shanti

49  
清原美彌子  
Higuchi Miyako

アジアでの図書館活動にあてて欲しいとのご遺志からいただいた「清原美彌子アジア図書出版普及基金」。甥の清原工さんに、美彌子さんの半生と、子どもと教育、出版への思いをつづっていただきました。

## 出版人としてアジアの図書普及を願う

伯母、清原美彌子は家族だった。祖父母がいた吉祥寺の家でも、祖父母がいなくなった後で移った武蔵境でも、同じ家に暮らしていた。1965年、伯母は「主婦と生活」という月刊誌の編集長になった。今、書いていても信じられないが、45年前のそのころ、商業出版の雑誌に女性の編集長はほとんどいなかった。「主婦と生活」のような、女性を読者対象とする雑誌ですらそうだった。

伯母には遠く及ばないが、ゆくりなくも編集や出版の周辺で仕事をしている今の私にとって、そのころの出版業界は、たぎるような活気に沸き返る、熱い季節のただなかにあつたように思える。当時、

「主婦と生活」は、ライバル誌との間で、100万部を超える熾烈な販売競争を繰り広げていた。伯母の対人関係もにぎやかで、作家や芸能人、さまざまな分野のスペシャリストたちと、昼夜を分かたぬ社交を重ねていた。

編集長就任と同時に始めた、ラジオやテレビでの人生相談の回答者としての伯母は、一般の人にも、名前を知っていたく存在になった。本人が「多くの読者と直接に語らうのチャンス」と書いていたから、きつかけはそういうことだったのかもしれないが、人生相談の回答者としての後の講演活動は30年以上続き、黒子であるべき編集者の仕事と両輪を成す、伯母の

ライフワークのようでもあった。伯母は著書の中で、自らの原体験について、次のように記している。

広い校庭では既に登校した大勢の子供たちが、歓声をあげながら遊んでいるのだが、乳色の霧の中に隠れて、姿ははつきり見えない。微風がきて霧が流れるように動き出す。乳色の霧の位置がだんだん低くなると、まず六年生の子供たちの頭、顔が霧の上に浮かび上がる。次に五年生たちの、そして四年生、三年生と背の高さの順に子供たちの姿が現れてくる。(中略)

私は自分の受けもちクラスの女の子たちの姿を認めると、とんていっ

て抱きしめたい衝動にかられる。「あ、いた！ うちの子供たちがいた！ 霧といっしょに流されていかなくてよかったねえ！」

「幸せは南にあり」(時事通信社)

終戦までの一時期、疎開先の北海道で、代用教員をしていたのである。仕事と連れ添ったかのように独身を通し、自らは子どもを持たなかった伯母だが、その愛心の奥底には、いつも「教育」ということがあった人ではなかったか、と私は思っている。

(清原工)

清原工 フリーライター。1997、2002年3月、「シャンティ」誌の編集に携わる。



清原美彌子さん(左) 親交が深かった瀬戸内晴美さんと 1970年

休みの日は、ちよっと一息...

## 「ラーシアのみずくみ」

作：安井清子 絵：砂山恵美子 こくま社刊  
ラーシアというのは、私が、ラオスのモン族の村で出会った3歳の男の子です。ラーシアが、おねえちゃんにくっついて村の水場に水くみに行き、小さいのに、一生懸命水を持つとどうするのを見て光景をもとに、作ったお話です。

山の村では、ラーシアだけでなく、小さい子が、お兄ちゃんお姉ちゃんにくっついて、ペットボトルに入れた水を一生懸命運んでいたり、そんな手伝いになるのかわからないのか、という姿をよく見かけます。でも、最初は遊び半分でも、ちゃんと家族が生きていくための役割に参加している。大人だけでなく、子どもたちもちゃんと生活を支えているのです。

そんなところから、子どもたちは生きる力を身につけていくのではないかと、日本で今、一番欠けているように思える、生きる実感は、きつとこんなところからくるのではないのでしょうか？ラオスの子どもたちの姿から日本の子どもたちに伝えたいこと...を絵本にしてみました。(安井清子)



# SVAからのお知らせ

2009年度代議員会、SVAの日のつどいを開催

2009年12月12日、電力総連事務所会議室（東京都港区）にて、2009年度通常代議員会を開催し、全国37人（委任状含む）の代議員が出席されました。2010年度の事業計画と予算について審議・承認をいただいたほか、98年末に施行された認定法に従ってSVAも移行が求められている公益法人改革の勉強会も開きました。

2010年内に公益社団法人を指すにあたって、会の基本規則となる定款を含め、機関設計の見直しと変更を行っていく必要があります。社員会員、そして地区会員の代表として運営に参加いただいている代議員の皆さまにも理解を深めていただくとともに、総会に準じて審議の場であった代議員会のあり方についてご意見、ご提案をいただく機会となりました。

議論の結果、「新法人制度の下での代議員制は、制約が多いので、これにはこだわらないが、目指してきた地域における発信者、行動者としての活動は、代わる任意組織をつくって継続させていく」SVAの事業や予算については、説明を聞き、意見できる機会を作っていくことなどが、確認されました。

引き続き開催された「SVAの日のつどい」では、非営利組織経営の第一人者、ピーター・ドラーカーを長年研究され、NPOの組織・活動評価にも積極的に取り組んでこられたSVA専門アドバイザー、田中弥生さんをお招きし、「地域を支える市民、世界を支える市民」と題して講演をいただきました。教育、福祉、医療現場であらわになつてきた社会保障制度の揺らぎ。暮らしを公的なセーフティネットに依存していくことが困難となる中で、求められているのは受益と負担意識を含めた市民性だといえます。市民として自覚と行動をおこしていくこと、それは地域を支えあいの社会に変えていくために私たち一人ひとりが問われていることであり、世界を変えていくことにもつながることなのだと思います。（事務局長 関高士）

## スタッフのひとこと「春」

■ 昨年4月のアフガニスタン出張で、小学校の校庭に大きな桜が咲いているのを見ました。日本の桜より高いところに花が咲いているのが印象的でした。この小学校は教室が足りないため四部制。隣の教育大学では8月に自爆テロがありました。子どもが良い環境で安心して学ぶことができない日が早くきますように。（アフガニスタン所長 三宅隆史）

■ 昨年9月に復職しました。入職12年目にして東京事務所勤務は初めてで、まだ入学したてのような気持ちです。とはいえ、いつまでも新入生気分ではいけません。タイ、ミャンマー（ビルマ）難民キャンプ事業での経験を活かし、現地事業をしっかりと支えていけるよう頑張っています。（海外事業課長 中原亜紀）

■ 1月から東京事務所のアフガニスタン事業担当として働いています。教育を通してアフガニスタンの復興に役立てるよう、頑張っていきたいと思っています。春といえば、わたしは実家がある滋賀県の田んぼを思い出します。水が張った田んぼに山や空が映り、見ていてとてもすがすがしい気持ちになります。（アフガニスタン担当 萩原宏子）

編集後記 ■ 先生たちを取材してくれたのは、海外事務所の日本人スタッフ。先生、図書館員、子どもたちと日々接しているスタッフだからこその聞いたエピソード、読んでいて私も心が温まりました。編集担当になって1年。みなさんの「見たい知りたい」に応えていく誌面を目指しています。ご感想、リクエスト、お待ちしております。（清野陽子）

## SVA30周年ロゴマーク決定！

2011年、SVAは30周年を迎えます。絵本からはじまった私たちの活動が、育っていく様子を表現しました。デザインは広報インターンの堀部友里さんです。



◎広報担当

## 歳末募金にご協力をありがとうございました

3,221件、24,153,627円の募金をいただきました。厳しい経済状況の中、たくさんのご協力をありがとうございました。

## 絵本が海をわたりました

2009年度「絵本を届ける運動」であつまった絵本は、23,409冊。2月に日本を旅立ち、3月から4月にかけて各地に届きはじめています。今年の目標は20,000冊。みなさまのご参加をお待ちしています。

◎「絵本を届ける運動」担当

## 人事のお知らせ

〈入職〉 萩原宏子	海外事業課アフガニスタン事業担当兼課長アシスタントスタッフ（1月18日付）
〈異動〉 磯部正広	カンボジア事務所長から、カンボジア事務所長代行へ（3月1日付）
山本英里	ミャンマー（ビルマ）難民事業事務所アドバイザーから、カンボジア事務所長代行へ（2月1日付） カンボジア事務所長代行から、カンボジア事務所長へ（3月1日付）
川村仁	ラオス事務所長から、ラオス事務所長代行へ（4月1日付）
伊藤解子	ラオス事務所長代行から、ラオス事務所長へ（4月1日付）
佐藤宣子	国内事業課CBS/会員/「リサイクル・ブック・エイド」担当から、「絵本を届ける運動」担当へ（4月1日付）
林飛鳥	国内事業課「絵本を届ける運動」担当から、CBS/会員/「リサイクル・ブック・エイド」担当へ（4月1日付）
〈契約・担当の変更〉	「クラフト・エイド」担当パートスタッフから、「クラフト・エイド」/広報担当嘱託スタッフへ（1月1日付）
〈退職〉	海外事業課アフガニスタン事業担当補佐嘱託スタッフ 山田心健（2009年12月31日付）

## 社団法人 シャンティ国際ボランティア会

〒160-0015 東京都新宿区大京町31 慈母会館2・3階

TEL 03-5360-1233  
FAX 03-5360-1220

WEB <http://www.sva.or.jp>  
E-Mail [info@sva.or.jp](mailto:info@sva.or.jp)  
郵便振替 00150-9-61724

● 当会へのご寄付は、所得税および法人税、相続税の優遇措置が受けられます。

「シャンティ」は、FSC 森林認証紙（SGS-COC-001773）にノンVOCインキ（石油系溶剤0%）で印刷しています。